日本分光学会創立50周年を迎えて

波 岡 武*

本学会は、その前身である「分光学会」が1951年4月4日に発足してから満五十年を迎えようとしています。この50年の間に、当初わずか120名に過ぎなかった会員数が1200人を超え、学会の活動も年毎に盛んになってきています。これは、本学会の諸先輩のご努力と会員諸氏のご協力の賜物であることは言うまでもありません。今50周年という節目にあたり、会員の一人一人が本学会の今後について考え、より魅力ある学会にするためには何が必要か、またどうしたらよいか、等に就いてみんなで議論してみてもよいのではないのでしょうか。

私達の学会に就いて考えてゆくうえで、この50年の歩みの跡を振り返ってみることが大切だと思います。分光学会の発足、日本分光学会への改組（1953年5月30日）、社団法人格の取得（1962年12月28日）、等の経緯に就いては植村琢先生¹⁾が、その後の経過に就いては30周年と40周年にあたって瀬谷正男先生²⁾と新井敏弘先生³⁾が、またより魅力ある学会への方策に就いては南茂夫先生⁴⁾が、それぞれ会誌「分光研究」に詳しく述べられていますので、是非一読していただきたいと思います。しかし、古い記事の入手は新しい会員の方達にとって難しいと思いますので、学会がこれまで辿ってきた跡を顧みながら、私達の学会のこれからに就いて考えてみたいと思います。

1950年の晩秋から翌年春にかけて、化学と物理の分光関係有志の間でそれぞれ独立に分光化学と分光学の研究会を創ろうという計画が進められていました。この両計画が互いの知るところとなり、それらを統合した形で、化学と物理の分光関連研究者の横の連絡母体として「分光学会」が1951年に組織されました。この会は同好会的な色彩の濃いものでありましたが、当時ほとんど連絡のなかった化学と物理の研究者が分光という主題を中心に集まったのは画期的な出来事であったといえましょう。分光学会規約の第2条にも「本会は分光学会研究者の連絡を図り、分光学の振興と、その基礎的研究及び生産と実用への応用を目的とする。」とあります。いわゆる縦割りの学会ではなく、分光という共通の手段で繋がった、基礎から実用までの広い分野の人達の学会、今でいう学際的学会のはしりの一つだったといえましょう。

同好会的な域を越えて、より活発な活動をしたいという会員諸氏の強い希望から、1953年に分光学会が「日本分光学会」へと発展的解消を遂げ、さらに1962年には「社団法人日本分光学会」として文部省の認可を得、社会的にも認知された公式の学会として名実共に独り立ちするに至りました。ここに至る十一年余に亙る先輩諸氏のご努力は、学会は自分達のものであり、それを盛り立てるのは自分達しかないという個々の会員の熱意に根差すもので、私達が大いに見習うべきことと思います。しかし、会員数が発足当初の十倍を超える今、同好会当時のように会員皆が同じ気概を持って学会の発展に尽すべきだというのではなく、学会の発展に会員個々人が貢献できる環境を学会として整えてゆくことが必要かと考えます。その点、従来の諸学会に見られた縦割りの構成をとらず、物理と化学の横の連絡を密にしようという学会創立の理念に基づいて設置された専門部会や夏季セミナーはこうした環境整備の一つでした。ここでは物理とか化学と

* Takeshi NAMIOKA, 本会監事・名誉会員・元会長

1) 植村 琢：分光研究 10, 181 (1961); 12, 2 (1963); 20, 176 (1971).

2) 瀬谷正男：分光研究 30, 1 (1981).

3) 新井敏弘：分光研究 40, 1 (1991).

4) 南 茂夫：分光研究 25, 1 (1976).

いう区別でなく、主題とした分光法とか装置といった共通の立場からそれぞれの問題を論じようとしてきました。このような活動には、各専門分野を縦糸に、共通の実験技術や方法論等を横糸として、多角的・総合的な見地から異なる分野の研究者が互いに学び合える大きな利点があります。物理・化学・工学・生物学・医学等の広範な分野に跨る学際的学会として本学会がこれからも発展してゆくうえで、こうした横断的な学会活動はますます力を入れてゆくべきものの一つだと思います。

学際的学会の常として、会員数の増加につれて学会誌「分光研究」に対する要望も多岐に互ってくるのは自然なことであります。そのすべてに応えることは不可能ですが、これまで歴代の編集委員会が現実的な解決法を模索しながら努力されてきております。最近の研究動向に就いて総合的に解説する総説、分光関連の主題に就いての基礎を易しく解説する講座、実用的な分光関連実験技術を紹介する分光便利帳、会員相互の意見交換や国際会議報告等を目的とする読者の広場、等がその現れとあってよいでしょう。より良い会誌を作り上げて行くためには、編集委員会だけではなく、会員皆の協力に俟たなければなりません。会員諸氏から、経費面も含めた現実的なアイデアがどしどし出てくることを期待したいものです。限られた財源の中で多様化する要望、特に会誌の月刊化や論文専門誌と情報交換を主とした会誌の分離発行はなかなか難しい問題ですが、会員へのサービス業務を含め、学会のホームページの有効利用が考えられます。しかし、ホームページの開設、特にその効率的運営には専従者を必要とする等、今の事務局だけでは対処できない面もあり、どうしても会員諸氏の協力が必要になると思います。ホームページの問題は理事会だけでなく、広く会員諸氏の間でも盛んに議論していただきたいものです。

分光学的研究・応用に有益な図書の刊行も本学会の主要な事業の一つであり、既に日本分光学会測定法シリーズ1～38巻が刊行され、学界に貢献しています。学会では更に、入門的・啓蒙的な軟らかい内容の新シリーズが、CD-ROM版を含めて、検討されていると聞いております。最近、各種の高性能測定機器が次々に開発され、スイッチを入れさえすればブラックボックスが測定データを吐き出してくれます。若い人達にとってこれらの最新機器は魅力的、時には魅惑的にさえ見えるでしょう。しかし、そのブラックボックスの原理、適用限界、等を正しく理解しないでは信頼できる解析結果は得られないという基本的な考えは、機器が便利になればなるほど大切になります。更に、独自のアイデアとそれに基づく計測法・測定装置の開発がもっと重要だということも忘れないで欲しいと思います。計画中的の新シリーズがこうした基本的な考え方の面でも役立つものになることを期待しております。

国際協力もこれからの大きな課題の一つでありましょう。1980年代後半には中国光譜学会代表の本学会表敬訪問や同学会講演会への本学会から講演者派遣等、両学会の間に交流の動きがありましたが、そのうちになんとか関係が薄れてしまったのは残念なことでした。多分経費の問題がその原因だったのではないかと思います。通信手段も当時とは全く異なる今、もう一度国際的な学会交流・協力の問題を考えてみてもよいのではないのでしょうか。何も大袈裟なことではなく、お互いに実行できる範囲内で近隣諸国の関連学会との交流を進めてゆくことが大切かと思います。例えば、インターネットを通じて互いに学会活動関連ニュースや学会誌の主要記事・論文のタイトルとアブストラクトを英文で交換し、それぞれのホームページ上で紹介すること等から始めるだけでもよいのではないのでしょうか。丁度、本学会50周年記念式典にノーベル賞受賞者である台湾中央科学院院長李遠哲 (Yuan T. Lee) 教授をお招きして“Vibrational Spectroscopy and Proton Transfer in Ionic Clusters”という題で御講演いただく予定と聞いております。これを契機に、台湾・中国・韓国等アジア諸国の関連学会と、政治とは別に、純粋な科学面での交流・協力が進めばと考えます。

50周年を迎え、新しい一步を踏み出す年にあたって、本学会の更なる発展と会員諸氏の一層のご活躍をお祈りして筆を擱きたいと思います。